

『すすきの歌』 岩本憲嗣

死んだようなアナウンス。不快な発車ベル。けたたましい通過音。俺のギターと俺の歌。秋にしては強すぎる直射日光がもろに降り注ぐ高架下で、それらの音が交じり合っている。駅前では俺と歳も変わらないような若いデュオが人だかりを作っている。俺はと言えば、目の前には鳩が五羽。それと裏返した帽子に入った茶色い小銭。空が赤くなった頃ギターと本日の労働の対価90円と共にアパートに帰宅する。こんな風になってもう三ヶ月。どうして一人で音楽なんてやってるんだか。今にも崩れそうな階段を登ると、そこには段ボールを抱えてニコニコした男が立っていた。「お届けものです」

湯を沸かしながら電話をかける。3コールもしない内に聴きなれたソプラノの声が耳に入ってくる。

「米ありがとう」

それを言いたかっただけなのに、お袋の話は終らない。

「ああ、わかってますよ。え？今日も仕事でき。大丈夫だって、いい職場だよ。うん、だからちゃんと働いてるしちゃんと食べてますって。ごめんこれから仕事の残りを片付けなといけないんだ」そう言って電話を切る。歌でなく嘘ばかり上手くなっていく。

カップヌードルにもやし炒めをトッピングしたお手製もやしラーメン。テーブルクロス代わりに辺りに散乱した就職情報誌のページを引き千切る。この部屋にはその手の雑誌だけは腐る程ある。全部出たアイツの置き土産だ。

「もう嘘もバレたと思う。やっぱり親の為にも真面目に働く」

そんな勝手を言って出てった相方。思い出してイラついたせいかラーメンのスープが零れる。「35歳迄」の文字の上に書かれた赤い×が滲み出す。

「ったく、働くって、オッサンに何が出来るっていうんだよ。これだから田舎者は……」新しいボーカルを見つければいい。でもそれも出来ずにいた。音楽を捨てて出て行きたい歳の、でも最高にいい歌声のアイツを忘れられずにいた。部屋にはまだ二人で撮ったライブの写真が貼ってある。格好悪い。ここに写ってるオッサンも。今こうしてる俺も。

昨日より暑い高架下。鳩だって二羽に減っている。変わらないのは騒音のバックバンド。歌っていると暑さで次第に意識が朦朧としてくる。そんな中で人影が一つ近づいてくるのが見えた。大きなキャリーバッグを引きずった小さな老女。彼女はよっこらせとその場に腰掛けるとこっちをずっと見つめている。

今日も空が赤く染まる。結局彼女は半日ずっと俺の歌を聴き続けていた。ひょっとしたら大手の音楽事務所の社長で……等という淡い期待もしたが、それは少し考えにくい。彼女

は彫刻のようにずっと固まったままだ。

何の重みもない帽子を拾い帰ろうとした次の瞬間、彼女はガクリと崩れ落ちた。思わず声が出る。

「婆さん!？」

「飲み物」

と、か細い声で囁く彼女。慌ててジーンズのポケットに手をいれる。出てきたのは労働の対価90円だけだった。

結局俺は彼女を背負ってアパートまで連れてきた。水道水をコップいっぱいに注ぎ渡すと彼女はそれを一気に飲み干した。

「生き返りました」

今まで死んでたのか。そう思いつつも彼女の話聞く。

キャリーバッグからクシャクシャになった新聞を広げる。そこにはニュースでも取り上げられた大手証券会社の倒産の記事。彼女の息子は東京に出てここに勤めていたらしい。しかしこの事件以来連絡が取れないと言うのだ。それでその息子を探しにきたと。

やはり社長とは縁遠い話だ。

「息子を知らないですか？」

彼女は何度も聞いてくる。そんなの知るはずない。そもそも何故俺に聞くのか。

「お仲間かと思ったんです」

仲間？ということは彼女の息子というのもミュージシャンだったのだろうか？いや、でも証券会社勤務だと言っていた。キョトンとした俺にさらにキョトンとした顔で彼女は語りかけてくる。

「ほら、こう、仕事のない方がやってらっしゃるじゃないですか、その、物乞いのようなのを。なのでお宅様もそういうのされてたので……」

生憎俺には物乞いの仲間はいない。それどころか音楽をやる仲間だっっていやしないのに。とりあえず落ち着いたなら交番にでも連れて行こう。そう思いコップを流しに置いて戻ってくると、彼女は昨日届いた段ボールの中を覗いていた。

「ああ、すみません、これ、いいですね。」

そういうと中からすすきを数本差し出して見せる。

米だけだと思ったのにそんなものまで入ってたなんて気づかなかった。改めて段ボールの中を見ると、新聞に包まれたすすきの束とお袋からの手紙。「もうすぐお月見です。使ってください」

確かに実家にいた時には毎年月見をやっていた。お袋はそういうのが好きなんだ。

「こんなの送ってもらってもね。腹の足しにもならないし」

ついつい減らず口を叩いてしまう。

「うちの息子はね、すすき大好きなんですよ」

すすきが好き？またキョトンとしていると彼女は笑いながら続ける。

「ははははは、食べるわけじゃないですよ。ほら、枯れて初めて人に愛される草なんてすすきくらいじゃないですか。青いすすきを見たって誰も何とも思わないですものね。あ、でもこれウチの息子の受け売りなんです」

確かに。その息子というのも面白いことを考えるものだ。

「そういえば今日は十五夜じゃなかったですか？」

彼女はよっこらせと立ち上がると覚束ない足取りで窓際に行く。外は赤から薄紫色へと、次第に夜の濃さを増していた。しかし雲が多くて月は見えない。

「……あら、みつけた」

急に彼女がつぶやく。この曇り空の中で月を？そう思い振り向くとそこには涙を流し佇む彼女。

すすきを握ったままの手が一枚の写真に伸びる。あの日のライブの写真。

「……これ、すすきですよ。すすきが……歌ってます」

雲の間から差した月明かりが、彼女と、その歌うすすきをあたたかく照らしだす。

立て付けの悪い窓からはすきま風が吹き付ける。すすきが、風に揺れ彼女の頬をなでる。まるで涙を拭いているように。

「……そうだよな」

俺はギターを手にするとすすきの揺れるのに合わせるように曲を奏でる。

泣いて余計に皺くちやになった顔の彼女がこちらを振り向く。

「これ、その歌ってた曲」

皺くちやの顔にはまたさっきとは違った皺が寄る。

握られた枯れたすすきは、今度は俺のギターに合わせるように、歌うように揺れている。

【終】

※2009/09/26-27 C2-Reading vol.05 『あき』にて“分貝新”名義にて発表・公演

※ご利用上の注意※

- ・本作はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・本作をご利用頂く際は必ず作者（gumba1227@hotmail.com）までご一報頂けますようお願い致します。
- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・仲間内で集まっての練習でのご利用。
- ・Skypeなどを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・各種配信サービスによる配信・生配信など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をご記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)